

佛心

二〇二二年六月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会

それは、なぜ食前と食後に手を合わせているのか？という質問でした。今日はその合掌について少しお話ししようと思います。

そもそも合掌とは何でしょうか？合掌と礼拝は、仏様への尊敬と感謝を表す作法で、私たち仏教徒にとって最も大事な作法です。けっして、「お金がいっぱい手に入りますよう」や「幸せになりますように」といったお願い事する作法ではありません。

合掌の発祥の由来はいくつかあります。ひとつは、敵意がないことを表すため。合掌した手で暴力的な行動はできませんよね。もうひとつは、インドでは古来より右手が清浄で左手が不浄とされてきました。そのため、その二つの手を合わせる姿は、一切の区別や差別を超えた平等を表すためと言われています。ある僧侶はこのことをOnenessと英訳していました。

そして仏説無量寿経には、『詣世自在王如来所稽首仏足 右繞三匝 長跪合掌 以頌讚曰』とあります。これを書き下し文で書きますと、『世自在王仏の所に詣でて仏足を稽首し、右に繞ること三匝して、長跪合掌して、頌をもつて讚めもうさく』となります。

You for saying thank you for me」と言ってくれました。このようにして楽しい食事をしていたのですが、その際にその子からある質問を受けました。

『阿弥陀仏がまだ仏に成る前の法蔵という菩薩であつたとき、後の師匠となる世自在王仏の足をおしただき、三度右まわりにその師の周りをめぐり、地にひざまずいてうやうやしく合掌し、次のように世自在王仏のお徳をほめたたえた』となります。

つまりは、阿弥陀仏が師の仏である世自在王仏を讚え、全ての衆生を救うという願いを起こされたことを表しています。そして、この経文のあとに皆さん親しみのある“讚仏偈”が続くわけです。

今日、私たちは阿弥陀如来のおはたらきに合掌し礼拝をさせてもらっていますが、阿弥陀仏もまた世自在王仏という仏様に手を合わせていたのです。この姿にならって私たちもまた手を合わせ礼拝、阿弥陀仏へ尊敬と感謝を表していると言えるのではないのでしょうか。

その合掌・礼拝の作法は、まず初めに両手を胸の前で合わせます。その合わせた手を45度の角度で胸につけます。その45度ですが、親指の第三関節の筋を胸につけると綺麗な45度になります。

そして礼拝も45度です。これが45度まで下げてみると意外ときついものです。また、頭を下げてしまうと、どこまでが45度かわかりません。そのため、一つのコツとして、胸前で合掌した手の線が地面と水平になったとき、45度されたこととなり、礼拝で体の上半身が45度になったことが分かります。これが合掌と礼拝の作法です。



先日、友人宅で一緒に夕食を食べたときに、そのご夫婦の子どもが良い言葉を教えてくれたので、その話を少ししたいと思います。夕食は豪華にも巻き寿司を頂きました。お醤油を取ってほしいとその子が言ってきたので手渡してあげると、ちゃんと目を見て「ありがとう」と言ってくれたのです。

私子どもだったときは、親からよく「ありがとう」と「ごめんさない」をちゃんとと言えるようになりなさいと育てられたものでした。それもあってか、その子に「ちゃんとありがとうと言って偉いね」と言うと、「人によくしてもらったら、ありがとうと言うのは当たり前のことだよ」と言われました。

それを聞いたときに、私も日頃の生活でちゃんと他人にお礼が言えているのだろうか、もしかすると人からの親切を見落としていないだろうかと少し心配になりました。私たち大人は、子供に様々なことを教えているつもりでも、実は多くのことを子供から学ばせてもらっていると思います。

しかも、私その子にお醤油を取ってもらって「ありがとう」と言ったとき、その子は「Thank

したが、大事なものは、仏様へ尊敬と感謝を表すことです。私自身忘れられない合掌を見たことがあります。

それは、ある門徒の臨終勤行をしたときのことです。病院の emergency room で読経をはじめると、脳梗塞のせいで動かないはずの左腕を胸元に近づけ合掌していたのです。そして口をゆっくりと動かし念仏を称えていました。そこには定められていた作法を超えた姿がありました。まさに彼がここより阿弥陀如来に合掌をしている姿だったと思います。

私たちは、生きているときは手を合わせて、心から「ありがとう」の言葉が言えるようになりたいものです。というのも、老いた人も若い人も若い人も、みんな支え合って生きている。自分の命というものは、自分の所有物ではありません。

いろんなのちによって支えられ生かされている命です。その命のありかたを知るとき、私たちはここから「ありがとう」と言えるのではないのでしょうか。そして私が死ぬときは、先達のように阿弥陀如来の本願力とお慈悲に感謝して、合掌しながらこの命を終えたいものです。

それはかつて、法蔵菩薩であった阿弥陀如来が師である世自在王仏に尊敬と感謝を示したように、私たちも合掌・礼拝を通して、阿弥陀如来に手を合わせていくことが大事だと思います。

トロント仏教会 駐在開教使

大内祐真